

【優秀賞】愛媛県人権擁護委員連合会こども人権委員会委員長賞

「願い」

四国中央市立土居中学校 2年 山田 美冬

多様性の認められる時代に生きていられる私はツイていると思う。今こうして自分が好きなズボンの制服を着ていられることも。だが、私は日常生活のなかでいくつか不満に思うことがある。

一つめは、身だしなみ検査のことだ。私が不満なのは、みんなのスカートの長さを確認しているとき。ズボンの私はどうしたらいいのだろうとってしまう。これは、男女で分けているが故にうまれてしまった不満だ。私の学校では、私が入学した年に校則が大幅に見直された。制服がスカートとズボンから選択できるようになった。先輩たちが生徒総会の中で制服のことで悩んでいる友達がいるかもしれないという意見が、校則改正のきっかけらしいが、選択できることは、とてもいい事だと思う。だが、それなら身だしなみ検査は男女で分けなくていいのではとってしまう。ズボンとスカートで分けたらいいじゃないか。でも、そう思うのは私がズボンだからだろう。私もスカートだったら気付かなかったと思う。やっぱり、相手の立場になるって、難しい。だからこそ、文字や言葉で伝えないといけないのだろう。

二つめもまた私の話になるのだが、ボーイッシュな見た目をしているからかよく LGBTQ なのかと問われることがある。私は今のところ違う。心の性も体の性も女だし、好きになるのは男だ。だからこそその質問は一種の偏見ではないのかと思う。女の子でズボンなのは、心の性は男の子、だなんて思っているんじゃないだろうか。私からしたらその偏見はけっこうしんどい。多様性というのは、何種類かで分けることなんてできない。性のあり方というのは人の数だけあって、みんながそれぞれ好きな格好をして、好きな人を愛して生きていくことが多

様性だと思う。それなのに、好きに生きている人に対して「あなたは髪が長いから女の子になりたいんでしょ」なんて言ってしまったら、言われた側は、絶対気にしてしまう。周りに気を遣わせてしまっているのかなあ、みんな性の多様性の授業の時とかに私、僕のことを思い浮かべてるのかなあ、心の中では差別してる人いるのかなあ、なんて思い始めてしまうだろう。私だって、思わなかったわけじゃない。結局、体の性が女の子でスカートの子は心の性は女の子、体の性が女の子でズボンの子は心の性が男の子、とか思ってる人がいるのだろう。そういう人もいれば、そうじゃない人もいる、そこをわかってほしい。性別だけが多様性ではない。好きになるもの身につけるもの、すべてが自由でいいじゃないかというのが多様性だと思う。性の多様性で学びを深めるのは大切なことであるが、学びの受けとめ方を間違ってしまうと、絶対に誰かを傷つけることになる。私だって、少し傷ついたし結構気にしている。改めて、「多様性」とは何なのか。今一度、クラスや学年のみんなまで考え直してみたい。

日に日に変化していく私を生活の中で感じているが、頭と心の中に、ずっと変わらないでいてほしいと思っているものが一つある。それは「傷つけない」という想い。人権の学習をしていくなかで私の真ん中にある想い。自分を傷つけない、周りを傷つけない、そんな強い思いがあるから、私はこんなにも熱心に人権の学習に取り組んでいるのかもしれない。でも、いつかは私も人を傷つけてしまうことがあるかもしれない。だからこそ今、傷つけないという一心で私は学び、生きている。誰のことも一度たりとも傷つけない完璧な人間になろうだなんて思っていない。ただ、自分も家族も友達も恋人も先生も、みんなが自然な笑顔で生きていけたらいいなと思っている。もしかするとこの作文も、その願いが派生したものなのかもしれない。